日本及び西洋文化と科学技術の問題

シュペネマン・クラウス

ここで、私は先ず、日本及び西洋文化の相違点を誇大に取りあげて、それをどうこう論ずるよりも、双方の文化を含む文化全体が危険にさらされている事実を指摘することの方が重要のように思う。その脅威こそ近代科学技術そのものから導かれたというのは、何と皮肉なことであろう。近代における自然科学と技術は西洋に端を発しているといってもいい過ぎではなかろう。ヨーロッパにおけるかなり通俗的な、しかも的を得た解釈によれば、それはギリシャ的な合理主義とキリスト教的な誤った世界及び人間観に由来しているということである。又、誤った解釈というのは、人間がこれ迄、自然の支配者か主人公のような顔をして、自然を暴恣して来たという史実に明らかに表現されているといえよう。

兎角、近代科学と技術は西洋思想と深くかかわり合っていることは確かなことである。

そのことはとりもなおさず、今日の西欧における科学技術の悪魔的側面が西洋において日本におけるよりも顕著に見られるということであろう。しかも、その点に歯どめをかけるのに必要な、新しい思想が西欧でまだ見い出されていないのではないかという疑問がつきまとう。

日本は西洋の科学技術を絶えず取り入れ、自己の文化の中で、それを統合し、発展させてきた。しかも、科学的にも、技術的にも、今や西洋を凌ぐ迄の発展をとげた。その上、日本ぐらいが、西洋文明を摂取し展開させ、しかも、自らの古来からの伝統文化を破壊させなかった唯一の国であろうかと思われる。

しかし、現在の日本において顧慮してみると、それでは、その日本文化が、技術発展の結果に生じた悪魔的な力を抑制するための充分な力を持ち合わせているかという疑問が生じてくる。

この質問に対して、私は次のような二点をとり上げて考察してみようと思う。

その第一は、日本人の持つ自然観である。

日本は古くから、森羅万象の中に神々の存在を見、樹木や山水の中に、それを認めたばかりでなく、動物や虫けらさえにも魂があると信じて来たのである。これは、ヨーロッパ的視点から羨ましい気がする。というのは、ヨーロッパにおける自然はもう長い間、神と切り離され、全く別個の存在になってしまっているからである。神は全く自然を超越した存在になりきってしまったのである。神が関与しなくなった自然を、人間は自らの目的にしたがって濫用し、酷使続けて来たのである。又、ヨーロッパ人は動物にも魂があるなどとは考えないから、問題はもっと深刻である。それらは全て「物」であり、人間が使用するために提供されたものに過ぎない。これが、ヨーロッパの技術による無分別な自然搾取の歴史的背景である。

そこで、もし、今日、日本の従来よりの自然観が単なる個人的趣味程度なものに留まることなく、世界の経済的、政治的決定に何らかの影響を及ぼすことが出来るならば、今日の、いや将来の世界は少しは他の方向に展開するであろうし、又したであろう。

しかし、現状はかなり矛盾に充ちている。例えば、土、日曜は自分の庭や盆栽にエネルギーを費やす建築業者が、週日は、新しい団地作りのために、ヨーロッパ人よりも、より無暴に山を切り崩しているといったような矛盾である。それはとりもなおさず二つの文化の相剋点における矛盾でもある。二つの相異なる文化から生じた異った自然把握上の作られた矛盾でもある。

又、日本の漁師たちは、自ら殺生した魚たちの霊を慰めるための儀式をとり行なうと聞く。しかも、そのような行事は自らの仕事を正当化するための儀式に過ぎず、残る一年の日々は毎日のように海に出て、魚獲高の増加のため、新技術を取り入れながら、容赦なく海を荒し回る。このようにして、魚はともかく、人間自らが生きる根拠さえも危険におとし入れて行く始末である。マルクスはこのような宗教的な機能をイデオロギーと呼んだ。将来、確かに人間が生き永らえるためにも古い日本の伝統文化を見直す必要が出てくるであろう。それは哲学や宗教における分野ばかりか、政治や経済にも何らかの影響を与える必要がありそうである。

第二に、日本における個と全体の調和である。私は日本の庭園が好きで、長時間でも飽くことなく眺めている。そして毎度のことだが、庭園の石の配置に感嘆する。その無駄なく、とぎすまされた美の中に、石一個一個が生命を持っている。個々が光っているばかりか、全体の石組みの中でそれは決して孤立していない。そして個が目立つことなく全体の中で調和を保っている。石相互の対話があるばかりか、そこに生息する全てのもの、草木一本一本に至る迄、関連し合っている。個を生かしつつも、全体とバランスがとれている。全体を重視すれば、個を殺し、無視するのが当然であるかのような西洋文化から判断すると、私はこの日本文化の特殊なあり方に、秀れた教訓を見る。庭園における個と全体との関係は、人間関係においても同様である。個々人は、自らのために生存しているばかりか、彼の属する全体のためにも生きているのである。私は全体の中以外に、自らの特性や能力を生かす場がないかのように思われる日本人に羨望の眼を向ける。しかも、彼が全体の一部であることを考えると不思議でさえある。この個と全体の関連は西欧において

とうに消滅してしまったからである。その好例は西欧の庭園である。ルネッサンス風の庭園を見ると、全体が強調され、個々は決して生かされていない。それに比べて英国の普通の庭にはまだ個々の草花が生かされてはいる。しかし、この場合には、全体がぼやけている。同様に、ヨーロッパの社会構造において、個人主義か全体主義かに走る傾向は、それを明確に示しているだろう。以上の二点を例にとっても、西欧は日本に羨望の眼を向ける。と同時に、ヨーロッパ人は日本が今後この移り行く世界にこの調和方式でやって行けるかどうかとの疑問の目をもって見る。具体的に二つの例をあげて説明する。

その一つは教育である。日本と西欧において、教育は子どもが社会に順応し統合するための役目を持っている。それはそれなりに重要である。というのは、この様に教育された子どもは、個人の利益だけでなく、会社とか全社会のために働くようになるからである。しかし、そこには問題もある。社会が静止していたり、殆ど変化しない限り、そのように順応するための教育は意味がある。しかし、今日のように急速に変化すると、古い教育とか知識は現実の社会問題に何の解決を持たらさないし、まるで役立たない。より必要なのは、子どもたちに、何が「善」であり「悪」であるかを問い、批判することを学ばせることであろう。今日は、順応力や調和よりも批判力や物事を解決する力などが、人間の存続のために要望されるようになって来ている。教育における民主主義ともいうべきだろうか。

もう一つの例は日本の外交政策である。私が見て来た限りにおいて、日本の外交は一方で戦後、国際舞台で出来るだけ目立たないように努めながら、他方で、アメリカや西欧諸国寄りのものであったと思う。しかし、この政策は、経済的にはこの日本の態度が非常な利益を持たらせて来たことは確かである。ただ、問題なのは、今日の国際政治は寺社の庭園でないばかりか、それ故に、その中で自らを全体との調和の中で生かせる何の枠組もないという点である。

教育におけると同様、今日の国際政治においても、理性的な分析力、新しく、しかも創造的なアイディアとか他者依存型とは程遠いイニシャティブを持った生き方が望まれるようになって来たことである。

この要請に対応するためには、日本の政治機構ばかりでなく、日本の人々の考え方の転換が今こそ急務となってきているといえよう。

経済的にも、技術的にも世界の最先端を行く国として、世界に何らかの意味において影響を与えるためには、何のアイディアも持ち合せず、従来通りの方法でいつ迄やって行けるであろうか。

以上の考慮は、不充分であるばかりか、浅薄しごく、一方的だと非難されるかも知れない。しかし、私はここで述べたいことをもう一度、結論的に纏めてみることにする。

日本の近代史における展開を見ると科学技術による近代化とは西欧化であるという発想法が、その帰結として、あの技術がもたらしたデモニッシュなものまで導入し、問題化して来ている点に迄考え

が及んでいないということである。そして、その問題をないがしろにして、文化比較を行っても、何の解決にもならない。むしろ、明らかにしたいのは西洋の文化も日本の文化も同様に、現在及び将来、起り得る問題の解決に、何らかの意味において寄与することがないならば、それは空中の楼閣に過ぎないということである。というのは、これらの問題は人間が生き永らえ、文化を存続させることを脅やかすようになって来ているからだ。日本は本質的に貢献出来る能力を持ち合わせているのに、この現代の問題性に気付いてさえいないと思われるのは、私の思い過ごしであろうか。

（大学文学部助教授）

表紙の遺墨について

大学設立資金の募金運動のために、新島襄は明治二十一年四月に東上した。徳富猪一郎に促されてであった。

だが、新島の健康状態はすぐれず、森有礼文部大臣を介して医科大学教授E・ベルツの診断をうけたほか、橋本陸軍軍医や難波一医師の診断を請うた。六月には八重夫人も上京した。そして八重は七月二日に、難波医師から新島の総合的な診断結果を告げられた。

それはじつにショッキングな説明で、新島は胃と心臓に疾患があるが、とくに憂慮すべきは心臓であり、「心臓中ノ薄皮ノ如キモノ血中ニ混シ脳中ニ上昇セハ、直ニ卒中ノ如キ病症ヲ来シ落命スルニ至ル場合モアルベケレバ、予ノ身内ノモノ予メ之ヲ承知スベキ」（「漫遊記」明治二十一年七月二日）である、というのであった。最悪の事態はいつ起こるかわからず、生命の保証はできないと医師から告げられたのである。「八重ノ愁歎一片ナラズ」と新島は書いている。

その夜から、新島はディヴィスその他に遺言のおもいで手紙をしたためるとともに、七月二日夜、日記「漫遊記」に、日本を脱国して以来現在に至る半生を回顧して、苦難にみちた道程をつづるのである。

表紙の遺墨はその一節で、前後は次のとおりである。

「帰国ノ後安中ニ於テ福音ノ種ヲ播キ初メタル事、大坂ニ伝道ノ手初メ、学校設立ノ企大坂ニ於テ失敗セシ事、京都ニ地ヲトシ同志社ヲ創設セシ事、デウイス氏ト力ヲ協セテ学校ト関西伝道ニ尽力セシ事、学校統御ノ困難、京都府ノ不深切ナル策略、外人来京ヲ拒ミタル事、予ノ平素虚弱ニシテ大事業ニ当ルニ大困難ヲ覚エシ事、外国教師ト内国教員ノ軋轢、外人ト生徒ノ不折合（下略）」。

アジアの人々からみた「日本文化」

――その単一性と非整合性――

横山卓雄

まずは言語について

アジアの人々の眼でとらえた日本文化という主題で、日本人の私が何かを書くことは、やや気の引けることである。たしかに私は、ここ五～十年の間に、インドネシアを中心に、マレーシア、タイ、フィリピン、インド、アフガニスタンなどの国々を訪問し、かつ地質野外調査をしてきた。〝野外調査〟という以上、都会地だけではなく、いわゆるカントリーサイド（田舎）へ行くことが多い。日本でも同じであるが、アジアの国々で都会をはなれるということは、英語がまったく通じないところへ行くということであり、そこで仕事をするためには「現地語」を話すことが不可欠になってくる。もちろん、あらゆるところで現地語を話すことは不可能であるが、「とにかく何とかしゃべってみよう」という心がまえだけは持っていたつもりである。少しでも現地語を話すと、むこうの人々は実にいろいろなことを語ってくれる。特に日本人に対する批判・批難は現地語でなければ聞けないといってよい。なるほど「悪口」や「冗談」など、ニュアンスが問題となることを、自分自身が英語で言えるかと考えてみれば、不可能なことは明白である。

〝現地語で話す〟上でもっとも障害になるのは方言である。たとえばインドでは、方言を数えると三五〇程あり、大きく分けて一三～一四に分類できるという。

パンジャブ州の小学校では、英語・ヒンズー語・パンジャブ語の三つが、国語（公用語）として教えられている。生徒達にとってみれば、パンジャブ語のみが日本の小学生にとっての「国語（生まれながらにして話していた言葉）」であって、あとの二つは知らない言葉である。この事情はインドネシアでも同じである。

インドネシアは大きな国であり、無数の島々からなる海洋国である。国内には何百という地方語があり、島によって言語が異ってい

る。たとえば、ジャワ島では西部がスンダ語、東部がジャワ語である。この二つは完全に違った言語である。たとえば、英語の How are you? にあたるのが、

インドネシア語——Apa kabar（アパ カバール）
スンダ語——Kumaha Wartosna（クマッハ ワルトスナ）
ジャワ語——Dos pundi Kabaripun（ドスプンディ カバリプン）

となる。しかも、それぞれの地方では現在もなお地方語が生きていて、地方語でなければ通じないことも多い。現在の公用語は、スマトラ南部の一地区の言葉をもとに作られ、それに地方語の影響が加わったものである。このような事情なので、公用語は単純明解である。そうでなければ互いに正確な意志を通じあうことができないのである。まさに我々の使う英語やインドネシア語と同じである。

これに反して、日本語はまさに「あいまい」であり複雑である。日本語の会話は〝言葉〟の表面だけでは、話し手の真意を知り得ない場合が多い。

現在の日本は単一言語、単一民族の国であり、文化に多様性があるといっても起源をたどれば一つである。日本という小さい統一体でしか通じない「言葉」や「習慣」が非常に多いのである。この単一性・統一性という特質は、日本文化のもつ最大の特徴の一つではなかろうか、長い歴史の中ではぐくまれ一様化して深みをましてきた文化、いうなれば完成度の高さが日本文化の特質なのである。西欧人の驚く「ハラキリ」「茶道」「和歌」「俳句」「日舞」「能」など、文化の単一統一性の見事な例といえるであろう。

アジアの人々にとっても、日本文化のもつ完成度（単一統一性）と「あいまいさ」が魅力の一つであるとともに、不可解な面であるという。あいまいさとは、ある意味での非整合性を意味する。前にのべた日本語そのものはまさにその典型である。更に「他人の名誉を重んじない」「貧者への施しをしない」「規則を平気でやぶる」など、日本文化には不思議な特性があるという。「アジア人のくせに、アジア人を理解する気もなく、協力する気もない」というのもよく言われる言葉である。

つり銭さぎか

インドネシアはイスラム圏、インドはヒンズー圏、タイは仏教圏の国である。宗教の教義に起因する生活習慣の違いは、それ自身に理由のないことが多いだけに外国人にとっては、理解をこえる。イスラム教徒はブタを食べないことは誰でも知っている。彼らに「それは何故か」と聞いても答えは返ってこない。逆に、「日本人は何故蛙を食べないのか」と聞かれて、返答に困ったことがある。インドネシアでは、蛙は上等の食物であり、トノサマガエルの後足をフライにしたものは特に美味であり、私の好物でもある。日本人が蛙を食べないのは単なる習慣であって、宗教上の理由がないのであるから、よけいに返答に困るのである。このような生活習慣の違いからくる困惑の例をのべてみよう。アジアの国々には、ミニバスが多く走っている。インドではタクシー、タイではトウクトウク、インドネシアではヘリチャやタクシーというが、三輪や四輪の軽車輌であり、たとえばバンドンでは、ホンダ三六〇ccの荷物車の荷台に幌

がかけてあり、荷台に小さな長椅子が向いあわせに作ってあるだけである。運転席の横に二人、荷台の小椅子に五人〜六人ずつ計一〇〜一一人、全部で約一二人の客をのせる。ふつうは更に車掌がのっていて、運賃を集めたり、行先を連呼して、客を呼んだりする。行先はミニバスのフロントガラスにも書いてある。車掌が行先を連呼しているものに乗ればよいわけだが、おもしろいことに、路線によって車種が変えてある。

運賃は一人七五ルピアである。一人で乗って一〇〇ルピア出すと、そのまま受取ってしまうことがある。二五ルピアのおつりをもらおうと思えば、請求すればよい。要するに、手を出せば、おつりをくれる。これは車掌が図々しいのではなく、当然おつりを出さなくてもよいのである。イスラム社会では宗教上、富んだ人々は貧しい人々に施しをする義務がある。我々は外国人であり、かつ一見して貧乏人には見えない。従って、彼等は大きいお金をくれると、おつりは当然もらっておくのである。

ホンダミニバスの車掌だけでなく、すべてのところでそうなので、このことを知っておかないと、いつも腹を立てていなければならない破目になる。

約十年前のことになるが、アフガニスタンで大失敗をしたことがある。北部アフガニスタンの有名な遺跡であるバーミアンにあるホテルのバーでのことであった。客は私一人で、トマリ木に座ってコーヒーを飲んでいると、バーテンがドル札を大量に財布から出して、勘定している。「たくさん、お金持っているね」と話しかけたら、「今日は大変もうかったのです」と言う。冗談に「私はお金がなくて困っているんだが、少しくれませんか」と言うと、彼はやや困った顔で一瞬考えていたが、財布のまま私に「どうぞ」と言ってくれたのである。これにはびっくりしたとともに、非常に恥かしかった。「冗談です」と言って平あやまりにあやまって返したが、こうした「宗教上」のことについての冗談は言うものではないと教えられた。また、アフガニスタンの首都であるカーブルでのことである。話はややはずれるがこの都市を日本ではカブールという。現地ではカーブルという。長年何故だろうかと思っていたが、昨年英国人と話していてやっとわかった。彼もカブールという。「現地ではカーブルというのに何故カブールというのか」と聞いたら、「英語ではカブールです」と答えられた。「なるほどね」と言うと「だから私はカブールと言ってもいいのです」と彼は言う。そうすると日本語もカブールなのかも知れない。そうだとするとこれも日本文化の一相なのだろう。他国の首都を英語読みにするのは失礼にあたらないのであろうか。これは「名誉を重んじない」例にならないだろうか。私は英国読みを日本語にするより、現地読みのカーブルを日本語にするほうがよいと思うので、いつも、カーブルと書くことにしている。

カーブルの中央広場であるスピンザールホテル前は、東京でいえば銀座か上野の中心街といった所だが、天気の日にはそこの噴水のまわりには老若男女が日なたぼっこをしていて、にぎやかである。ここには日本でいう乞食が多い。我々のような外人を見ると五、六歳の子供が来て、お金をくれと手を出す。渡しても決して「ありがとう」とは言わない。当然という顔でもらってあげたという雰囲気

であり、やや違和感があるが、さっぱりしていて気持ちがよい。これも、お金をもらってやることが善行であるからであろう。ここで、中年の乞食に金をねだられた時、「私は財布を落として今、金がまったくない。困っているところだ」と言った友人がいる。これも、冗談で言ったのだが、その乞食が、「今日、私が今までにもらった金はこれだけだが、これをあげる」と言って、片手いっぱいのコインをくれたそうだ。断わったら怒られると思ってもらってしまったという。

アフガニスタンもインドネシアも同じイスラム圏なので、イスラム教の教義によって、富んだ人々から〝施し〟をもらうのは当然なのである。だから、おつりはほとんど払う必要がないことになってしまう。

貧しい人々には施しを！という思想は決してイスラム圏だけにあるのではない。たとえばタイは典型的な仏教圏だが、仏様への供え物と貧しい人々への施しは、諸民の当然の義務であり、現地の人々とつきあってみると、月収二〇〇〇円ぐらいの人が、当然のように五〇〇～一〇〇〇円の金をあげてしまうのに驚くことが多い。

アメリカのレーガン大統領は「福祉のための費用は個人・民間の寄付金で」という要請を国民に行い、「これはアメリカの伝統であり、現在も生きていると信じます」と言っている。昨年は十兆円以上の福祉基金が個人や民間レベルで集っているという。西洋文化もイスラム文化も東アジアの仏教文化も、すべて「貧者への施し(?)」を社会人の義務とする文化的伝統をもっている。日本ではむしろ「家族以外は敵と思え」という態度が強い。福祉や教育に寄付しても決して所得税を減額しない日本の税法はまさに日本文化の負の一相を表現しているといえないであろうか。

もう一つの例だが、私が昨秋出席した「SEATER」というユネスコの会議がある。これは「東南アジアにおける地質学と天然資源に関する連絡会議」なのだが、日本はこと全く醵金していない。自然科学上の類似の会には物理化学系と生物系とがあるが、この二つにはそれぞれ十万ドルずつだしている。ところが「天然資源開発」に関するこの会には出せないという。理由は、『この会議が「侵略」の手先になる可能性がある』という日本国内の一部の団体や世論のためだという。この会は将来「アジアにおける天然資源開発の連絡機関」に成長するだろうといわれている。「西ドイツ・アメリカ・フランスなどは、勢力的に協力しているのに日本だけは、この会を無視して、企業サイドのみで天然資源開発を行っているが、政府や国民レベルでも考えねばならないはずであろう。日本人は何を考えているのだろうか」と会場で、アジアの有力な学者にいわれたことが今でも耳に残っている。「政府ではだめだが企業なら」といった考え方が、他国で通じるはずがない。これも日本文化のあいまいさや非整合性の表現であり、こうしたことを許すのは、日本人及び日本文化の特質なのだろうか。いろいろかいてみたが、どうも心の晴れない文章になってしまった。論旨に一貫性を欠くこと、議論のたらないことは勿論だが、私にとってまだ能力の越えるテーマなのであろう。読者に陳謝したい。

（大学工学部教授）

日本文化の理解のために

笠井昌昭

ひところ「右の脳」と「左の脳」ということが話題を賑わせたものでした。脳卒中で右側の脳をやられたときには言語障害が起こらないのに、左の脳をやられると言語が不自由になり、さらには失語症になる。つまり、言語のコントロールは左の脳で行なっているということから出発して、多くの民族は右の脳でふつうの音や音楽を受け入れているのに、日本人だけは音や音楽をも左の脳で受け入れてしまう、というのです。

これは角田忠信さんというお医者さんの研究ですが、そのことから、西洋人をはじめとして虫の声などは雑音に近いものとして右の脳で知覚するのにたいし、日本人はそれを左の脳で言語と同じように知覚する。そこに日本人独特の「虫の声」にたいする美的感受性が生まれてくる、という興味深い問題が提示されてもくるのです。

この角田氏の『日本人の脳』という示唆豊かな書物に接する以前に、

秋になって虫が鳴いている。

という、日本人ならきわめて自明な文章を、そのまま外国語に移すことがいかに困難であるか、ということに注意を促されたことがあります。もし、これを英語に訳すことにして、虫に insect を当てれば、向うの人に「蟻や虱などが鳴くのか」と言われてしまうのが落ちで、いちいち蟋蟀・螽蟖・鈴虫・松虫などと具体的に名を連ねなければなりません。事情はドイツ語でも同様で、秋啼く虫を一語であらわすような語はないようです。しかし、では「秋になって蟋蟀や螽蟖や鈴虫などが鳴いている」というふうに翻訳したとして、それで「秋になって虫が鳴いている」という簡潔な日本語の文章にこめられた情感がそのまま伝わったり、理解されたりするかといえば、そうはいかないところにむつかしさがあります。たとえば、ツヅレサセコオロギという名がありますが、これはこの蟋蟀の鳴く音を「綴れ刺せ、綴れ刺せ」という言葉として聞き、秋の深まりとともに虫の声が冬仕度の衣作りやつくろい物を促している、というふうにとらえるところから起こっています。そしてそこには、行く秋にたいして一種の佗しさや心細さが重ね見られてもいるわけです。

このような情感を媒介として日本文化が形成されているところ

に、ひとつの特色があるのですが、それは夏の蟬においても同様です。油蟬の声にはじまってカナカナ蟬がやがて鳴き、旧盆ころにはミンミン蟬が鳴き立て、夏の終り近くなるとツクヅクボウシが啼く。そして人びとはその声を「尽くづく惜しい」と聞きとって、迫まりくる秋を感ずるのです。しかもその蟬の声を「尽くづく惜しい」と聞き、またその蟬を「つくづく法師」と名づけたところに仏教的な無常観が重ねられてもいるわけですから、これを雑音の一種にしかとらえない耳をもつ外国の人びとに理解してもらうのは、大変むつかしいと申せましょう。私の外国生活の体験はまことに貧しいものですが、アメリカ東部で一夏過ごす間に蟬の声を聞いたのはたった一回でしたから、米国では蟬の声などなじみがないのかも知れません。また叢で虫は鳴いてはいるのですが、向うの人びとが気にもとめていないのはやはり事実です。そこで注意してみますと、西部劇映画でいよいよ主役と敵役ふたりの対決というクライマックスになって、音楽も鳴り止み一瞬シーンとします。そのとき蟋蟀の声だけが聞えたりしてくることがあって、日本人の観客にはそれがまたとない効果として受けとられるわけです。ところが、当の監督にしてみれば、それは意識的なものではなく、偶然虫の声がトーキーに入ってしまったというに過ぎないのが実情といえましょう。

このように、虫の声にたいする日本人の思い入れにはまさに独特なものがあるのですが、中国でも詩文の世界に虫の声は殆どとりあげられていないということをみても、単に西欧との比較だけでなく、東洋においても日本文化はかなり独自な面をもっているということの一端が、おわかり頂けるとおもいます。

右の虫の声にたいする日本人の特別な思い入れといったものは、右の脳・左の脳という生理学的な問題に至るまえに、やはり弥生時代（前三世紀～三世紀半）にはじまる本格的な水稲農耕の上に築かれた農耕文化に起因するところが大きいと思います。四季の変化のきわだった気候風土と、弥生時代いらいの水稲農耕にもとづく一連の生活様式、および稲作に関する農耕儀礼、そしてあらゆる存在に生命ないしは生命力を感ずるアニミズム的な観念、等々から形成される農耕文化が、まず日本文化の根底にあります。もともと四季の変化のきわだった風土に生きてきた日本人は、水稲農耕とともにより四季感を鋭敏に育て上げました。そしてこのモンスーン地帯に属する日本の生活しやすい風土は、アニミスティックな観念を育てるとともに、一方、絶対者にたいする観念を育て上げることはきわめて稀薄であった、ということにも注意する必要がありましょう。キリスト教の母胎であるユダヤ教、回教、そしてまた仏教も、そのいずれもが生活条件のきわめて厳しい乾燥地帯に生れたこと、これらの諸宗教が生きることの苦しさを強いられた風土から生まれ育ってきていることを想えば、日本が長い歴史をもちながら世界の三大宗教のような合理的宗教を独自にもちえなかった理由も、それなりに理解されるでしょう。信仰が契約であり、法の観念もまた契約の思想にもとづいているというようなことは、日本人にはとうてい理解をこえた性質のものだったのです。さてこの農耕文化の上に重なるのは、六世紀前半にもたらされた仏教文化です。一口に仏教文化といっても、古代仏教と鎌倉以後に伝えられた禅宗とでは日本文化の形成に与えた影響は異なりますが、農耕文化の上に重ねられたと

の仏教文化が、日本文化に独特の色あいをにじみ出させていることは否めません。

六世紀前半に入ってきた仏教文化は、造形文化の上では仏像彫刻に代表される文化です。仏像彫刻は飛鳥時代から鎌倉時代の半まで変化をみせつつ展開してきますが、鎌倉時代の後半には芸術的生命を閉じます。そして平安時代からしだいに盛んになってくる絵画が彫刻にとってかわり、室町時代以降はまったく絵画一辺倒の時代になりました。これを比喩的にいえば、飛鳥から鎌倉中期までは彫塑的世界、それ以後は絵画的世界ということになります。彫塑的世界とは三次元的世界であり、明瞭性・完全性を志向します。それにたいし絵画的世界は二次元的世界であり、不明瞭性・不完全性をその属性とします。その意味で古代律令制国家の時代は律令そのものも法として具体的であり、藤原京から平安京にいたる都城プランも碁盤目に区劃された明瞭なものであり、また藤原道長が「この世をば我世とぞおもふ望月の欠けたる事もなしと思へば」と歌うとき、そこには欠けることのない完全な満月が要求されたのでした。ところが、鎌倉時代の半につくられた最初の武家法である「貞永式目」は律令に比べてこれが法律かというようなものであり、鎌倉以降の地方都市のプランは平安京のような明瞭なものではありません。そして『徒然草』は「花は盛りに、月はくまなきをのみ見るものかは」といい、完全なるものの否定へと向ったのでした。

右に私が彫塑的世界と名づけた日本の古代文化は、中国の六朝から隋・唐の文化を母胎として形成されました。その隋唐文化は漢民族独自の文化というよりも西方の影響をもつ国際的文化であり、かつ黄河流域に展開したこの古代中国文化は乾燥地帯の文化でもあります。翻ってエジプト・ギリシャ・ローマの古代文化は乾燥地帯の文化であるとともに彫塑的文化であり、古代中国の文化も同様です。飛鳥時代から鎌倉中期までの日本の文化は、そのような中国の古代文化を母胎とし、その影響裡に成立したものです。しかしながら、三次元的視覚と思考とをもつそのような彫塑的文化は、中国古代文化の強い影響を被っているあいだは育ちましたが、どうも弥生時代に培われた日本人の肌合とは本質的に異なるようでした。鎌倉中期以降は、揚子江流域の湿潤な気候風土に育った南宋文化を母胎として日本文化が展開しますが、この方が弥生時代いらいの日本の土壌にしっくりしたものでありました。その証拠に今日、日本文化の代表としてかぞえあげられる茶の湯・いけ花・能・狂言・水墨画・石庭・連歌などみな室町時代になって成立したものですし、俳諧や歌舞伎にいたっては江戸時代までまたなければなりません。また畳を敷きつめた部屋の出現も応仁の乱前後のことで、その上に布団を敷いて寝る生活様式は江戸も元禄ころからです。こうしてみると、今日にうけつがれている日本文化には、鎌倉時代以前に形成された文化の継承の意外に少ないことが知られます。そして、茶の湯・いけ花にはじまる諸文化の一般的性格の中に、不明瞭性や不完全性への志向が顕著であることは申すまでもありません。そしてそれは今日の日本人のもつ曖昧性へとつながります。最後に、茶の湯・いけ花・能等々の諸文化の根底に、農耕文化とその上に重ねられた仏教文化とが存在していることは、見落としてはならない点であります。

（大学文学部教授）